

復刊のこゝば

島津保次郎

日本電気株式会社、その機關雜誌「日電月報」を創刊したのは、大正十三年五月のこと、その目的とするところは、社内に於ける研究の發表、新製品の紹介及び其他に依り、電気通信界に於ける最新技術を紹介することにあつた。爾來二十數年に亘る間に、日電月報の歩んだ道には幾多の變遷があつた。即ち昭和十六年七月には、「日本電気研究季報」の發刊に依つて錦上更に華を添え、昭和十八年には社名の變更に伴つて、日電月報は「住友通信機彙報」となり、研究季報も「住友通信研究季報」となつたが、太平洋戦争が酷となり、用紙の制限が漸々きびしくなるに及んで、電気通信關係社の全機關雜誌を統合して「通信工業」とするの止む無きに至るや、住友通信機彙報も、住友通信研究季報も、一時その名を消した次第であつた。しかるに不幸なる終戦後の混亂に當り、通信工業も廢刊せられるに至り、茲に一時的空白期間が齎されて今日に及んでいる實狀である。今この間に於いて月報、彙報或は季報の歩んで來たところを顧みる時、我國に於ける電気通信界の進展に寄與せるところが少くなかつたことを感じ、私かに誇とするものである。即ち月報或は彙報は、製品の紹介及び通信技術の通俗的演述を主として、寧ろ大衆的なことを目標としたのに対し、季報は純粹の學術的論文の發表機關として独自の

立場を持ち、夫々の分野に於いて特色ある寄與があつたのである。しかしてこの間に於いてこれ等の誌上に發表せられた有線無線の通信方式、回路、或は機器、及び眞空管、電気音響機器等に關する論文は、日本電気株式会社に於ける技術の結晶せるものとして、廣く江湖の參考に供せられたのである。

我國に於ける電気通信に關する技術の現状を考察するに、不幸なる終戦時の混亂は、當然あるべきより以上に我々の技術の質を低下せしめた。この事實は、戦時中に於ける海外技術の進歩に對して、我國のそれが甚だしい遅れを生じていたのと併せられて、戦前に於いて關係技術者の努力に依つて漸く近づくことを得つた世界の水準からは、遙かに遅れてしまつたことを痛切に感ずるのである。我々はあらゆる努力を以つて、この技術的遅れを取戻し、出来るだけ速かに先進の水準に到達することに努めなければならぬと考える。終戦後三年を経た今日に於いて、あらゆる面で復興が叫ばれ、推進せられているが、電気通信の復興は交通運輸の復興と共に、あらゆる事業に先行しなければならぬ。この時に當つて、電気通信界に於ける技術水準の向上のためには、如何なる努力も惜しまるべきではない。この意味に於いて科學技術の振興の必要を感ずることの切なる、今日より甚だしきは無いと考えられるのである。

終戦後、ものいわざること茲に三年、我等の腹も些か膨れたが、我等も亦現在に於ける斯界の要望に應えて、何等かの寄與をなすべき時であることを切に感ずる。電気通信綜合技術雜誌「NEC」を發刊せんと企畫せられた所以である。蓋し我々が意圖するものは、日電月報の復刊であり、日本電気研究季報の再出發である。しかるに諸般の事情はその全面的顯現を望むべく餘りに隔りが大であることを感じさせる。依つて暫くその中間に處して、月報よりも更に季報的に、季報よりも更に月報的なところに留まらざるを得ないのである。NECが目標とするところは、自らこの間に在する。唯、我々が希つて止まないのは、過去に於けるが如く、月報及び季報をして夫々そのところを得しめることであるが故に、敢えてここに叙して復刊のこゝばとする所以であるが、翻つて考えれば、NECはそれ自身に於いて獨歩の地位を得てよい様にも感ずる。その然るを得るや否やは、一に今後の成長に俟つべきものである。NECに於いて發表せられるものには、我々の独自の研究成果もあろう、新製品の紹介もあろう、或はまた海外技術の紹介もあろう。これ等に依つて叙上の目的を達しようとするところである。大方の諸賢、顧わくば御愛讀を賜わらんことを。しかし御鞭撻と御支援とを惜しみ給うこと勿れ。(筆者は日本電気取締役技師長)

目次 (復刊第1號)

復刊のこゝば.....島津保次郎	3
極超短波多重電話装置の試験結果.....	
.....坪井貴志男・藤本久勲	4
超短波移動無線機.....坪井貴志男	8
電熱應用の眞空管硝子加工機械.....	
.....小關賢三・矢野直愛	13
海外ニュース.....	16
金屬眞空管MB-850.....	
.....原島治・小關賢三	
.....川田武雄・佐藤雪男	18
交換用手腕掛送話器の改良.....	
.....小山久治・竹見裕二	24
百萬サイクル電話方式.....	
.....黒川武夫・友成治大	27
618型マイクロホン.....吉村貞男・坂本吉弘	29
海外ニュース.....	31
編集後記.....	32